

「愛語」と聞くと、みなさんは動物愛護などの愛護を思い浮かべるかもしれませんが。しかし、本日のお話の愛語は、愛情の愛に言語の語と書く「愛語」です。

道元禪師が著された『正法眼蔵』の中に、在家信者のために書かれたと考えられる「菩提薩埵四摂法」という巻があります。これは、「菩薩が行う、生きとし生けるものための四つの行い」という意味で、布施・愛語・利行・同事の四つが説かれています。菩薩とは、地藏菩薩や観世音菩薩などに代表される仏さまのことで、自分だけでなく、あらゆる苦しみから人々を救おうと誓いを立てて、仏教の修行を続ける仏さまをいいます。たくさんあるお誓いの中の一つ、四摂法の中の二番目が「愛語」です。

「愛語」について道元禪師は、

「愛語というのは、まず、いつくしみの心を起こして、やさしくいたわりのある言葉をかけなさい。決して暴言を吐くようなことをしてはならない。」と説かれます。

例えば、病気の人に対して、「お大事に」と声をかけます。また、久しぶりに会った人などに、「ご機嫌いかがですか」と相手を気遣う言葉をかけます。こうした行いをしていれば、次第に愛語が増えていくはずですよ。

「生きている間は好んで、やさしく、いたわりのある言葉を使いなさい。」と道元禪師は戒めます。

ですから、愛語を使う際には、「まず、いつくしみ愛する心を起こす」ことが大前提になるのです。

『口の中の斧』という仏教の言葉があります。口の中に斧があるという教えですが、簡単に言うと、言葉も使い方によっては相手や自分を傷つけてしまうということ戒めた教えです。挨拶もなく文句ばかりを言っていては、いつくしみ愛する心など起こるはずありません。

私たちの一日は、朝の挨拶から始まり、外に出ると、「大丈夫ですか」「すみません」「お先にどうぞ」「ありがとうございます」、そして家に帰ると「ただいま」と言い、「おやすみなさい」で締めくくるわけです。

道元禅師は、さらに、「^{めん む}面と向かって、やさしくいたわりのある言葉を聞くと、顔の表情も良くなり、気持ちも晴れやかになることでしょう。また、^{ひと}人づてに聞いた、やさしくいたわりのある言葉は、心や^{たましい}魂にまで刻み付けられるのです。」と説かれます。

どうぞ、みなさんも、やさしくいたわりのある言葉を^{そっせん}率先して使おうではありませんか。

— 終 —